様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４１０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２６６４

研究課題名（和文）ライフヒストリー的アプローチによる日本語教師の「二重の応答性」の発達研究

研究課題名（英文）Development study of "double responsiveness" of Japanese teachers by life history approach

研究代表者
康　鳳麗（KANG, Fengli）

鈴鹿医療科学大学・保健衛生学部・准教授

研究者番号：３０３９９０３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　熟練日本語教師の「熟練性」を「二重の応答性」の獲得とその発達に焦点化して、事例研究を重ねてきた。初任期、中堅期、熟練期の教師の事例研究を行った。その結果、教育内容に主要な関心が行き、学習者や学習環境に目を配ることができない初任期の教師は、「二重の応答性」そのものがうまく機能しない、のに対し、授業スタイルが確立してくる中堅期においては、学習者の応答をモニタリングすること、すなわち「二重の応答性」がうまく機能するようになる。熟練期の教師にあっては、学習者の応答に対して、自らの応答を瞬時に、柔軟に変えていく力量を持つことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：We focused on case studies focusing on acquiring "double responsiveness" and developing its "skill" of skilled Japanese teachers. We conducted a case study of first-term, middle-term and experienced teachers for Japanese teachers in Taiwan and for Japanese teachers in Tianjin. As a result, the first term teacher who has a major interest in the content of the education can not look to the learner or the learning environment. So "double responsiveness" itself does not work, but , middle-term teacher established his(her) teaching style can monitor the response of the learner, that is, "double responsiveness" works well. For a skilled teacher, it became clear that it has the ability to instantaneously and flexibly change his(her) response to the learner's response.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教師　熟練日本語教師　二重の応答性　ライフヒストリー的アプローチ

１．研究開始当初の背景

日本語教師の熟達化研究は、近年、技術的熟達者モデルから反省的実践家モデルへの転換に伴ってあらためて重要な研究課題として浮かび上がってきている。熟練教師の「熟練性」とは何かについて、熟練教師と初任教師の実践的思考様式の比較研究（佐藤・秋田 1991）や比喩生成課題による教師の教える経験に伴う授業イメージの変容研究（秋田 1996）などの研究によって、(1)即興的思考、(2)不確実な状況への主体的な関与、(3)多元的思考、(4)文脈に即した思考、(5)発見的反省的な問題構成の方略などの熟練教師の思考様式の特徴が明らかにされている。こうした動向を受けて日本語教育においても教師の熟達化研究として実践的思考様式の研究（野口 2005）、授業イメージの変化（藤田 2010）等の個別研究が進み、その上に教師の熟達モデル（松尾 2010）が提案されている。しかしながら、各々の教師においてどのような経験をきっかけに、信念の変容が起こり、方法・技術の整合性が再構築されていくか、については研究がまだ十分でない。

これまで著者らはライフヒストリー的アプローチによる教師の授業スタイルの形成過程を明らかにするため事例研究を積み重ねてきた。授業スタイルとは、その教師が授業を構想し、教材づくりや授業を行う際に見られる特徴のある「一貫性」である（森脇 2007）。ライフヒストリー的アプローチとは、教師の「語り」をベースに、教師自身の実践記録や分析者の観察記録など、データを多面的に採りながら、教師としてのカリキュラム経験と授業変革の歴史を、授業事実のレベルで丹念に洗い出そうとする試みである（森脇 2009）。

これらの事例研究の研究過程で、熟練教師と初任教師の授業におけるふるまいの大きな違いとして、両者に機能する「二重の応答性」の内容と質の違い、という点に注目するに至った。「二重の応答性」とは、もともと医療分野で、患者が生活世界に応答しようとしていることに医療従事者が「応答」していく様をあらわしている(平山、松下 2006)。平山らによれば、学生たちと患者の間の関係性は、(a)学生は患者に対して理学療法を提供する→患者からの拒絶を受ける。(b)（患者の）身体反応を感じることができるようになる。(c)患者が新しい身体と生活世界との再構築へと応答していることに気づき、その応答に理学療法士として応答しようとする 。「二重の応答性」を獲得することによって、初めて患者に受け入れられていくのである。

「二重の応答性」の獲得は教師のキャリア形成の世界においても起こる。その過程は以下の通りである。(A)自分の持っている知識、そして、教材研究をして得た知識をわかりやすくかみくだいて教えようとする（一方的、伝達的な段階）。(B)学習者の反応（言語的身体的反応）を感じ取れるようになってくる。(C)学習者が自らの文脈に沿って、例えば生活知と結びつけながら理解（応答）しようとしているのを支援（応答）することができるようになる。

教師の熟達化においても、理学療法士の「二重の応答性」の獲得と同じような過程を辿るが、違う要因も働く。 １．教師は子どもを育てると同時に文化の伝達という仕事を行わなければならない。２．学習においては学習者が相手なので、コミュニケーション能力の未熟な学習者の応答をキャッチしなければならない。３．一対一の仕事ではない制約、逆にいえばメリットもある 。患者一人を相手にすればいい理学療法士とは異なり、教師は一対全体を常に意識していなければならない。一人に対するきめ細やかな対応には限界がある。だが、一方で学習者どうしの関係性を利用できるという点においては利点にもなる。

「二重の応答性」を獲得するには、自己変革の必要性、学習者の状態を把握する方法の獲得、応答の方法の獲得、といった過程が必須である。

初任者においても学習者の応答の予測や反応という形で「二重の応答性」は未熟な形態で存在する。しかしながら熟練教師の「二重の応答性」はその配慮が教室全体に行きわたり、しかも瞬時に的確な判断をしながら応答する。空間的な認知と同時に時間的な認知（時間配分予測等の修正）を行っている。つまり「二重の応答性」もその内容と質を発達させている。

こうした熟練教師の力量は、どのように獲得されるのであろうか。おそらく「学習主体の再発見」といった経験や自らの信念の問い直し、方法や技術の再構成といった一連の過程が必要とされるだろう。そのことを熟練教師の授業参加・観察、またライフヒストリーインタビューによって明らかにしたい。

２．研究の目的

本研究の目的は、①熟練日本語教師の「熟練性」を、とくに「二重の応答性」の獲得とその発達に着目しながら事例研究を通してその具体的な姿を明らかにすること、②熟練日本語教師はその力量をどのような過程で獲得して行ったのかライフヒストリーインタビューを通して明らかにすること、である。更に①②から、③日本語教師としての「熟練性」を向上させるために各ライフステージにおいてどのような技能や実践的知識が必要なのか、教員養成段階やＯＪＴ（キャリア形成）の過程で必要な経験やその省察、を具体的に示すことである。

３．研究の方法

まずは教師の「二重の応答性」に注目しながら熟練教師と初任教師との授業の比較研究を行う。授業観察・分析およびその授業の特質についてライフヒストリーインタビューを行う。研究対象は初任期の教師（１～５年目）、および熟練教師教師（15 年以上の経

験）とする。両者の比較研究を行うことにより、「二重の応答性」の内容や質、その機能や意味を明らかにすることができる。

具体的には、「二重の応答性」が焦点化される、教材や活動の構成と実際の使用場面におけるギャップへの対応場面、発問や指示に対する学習者の応答場面、そして学習者の授業の振り返り場面における応答の３つの場面に絞って、両者の応答を比較対照し、その特徴を抽出する。すでに筆者らがライフヒストリーインタビューを行ってきた熟練教師を核にして対象者を 10 名程度に広げたい。また初任期の教師も同数程度事例研究を行う。それが１，２年目の目標である。それらは個別教師のモノグラフとして記述されることになる。

研究期間後半(２，３年目)においては、さらにモノグラフを積み重ねながら、個別事例研究を超えて、「二重の応答性」の獲得と発展を核に教師の力量形成のイメージを描き出し、実践経験においていったいどのような質の経験が必要か、そのためにはどのような条件や省察が必要なのか明らかにする。またその今日的な意味についても明らかにしたい。

４．研究成果

熟練日本語教師の「熟練性」を「二重の応答性」の獲得とその発達に焦点化して、事例研究を重ねてきた。「二重の応答性」とは、もともと医療分野で、患者が生活世界に応答しようとしていることに医療従事者が「応答」していく様を表している。医療分野と教育分野の違いはあるが、対人コミュニケーション関係構築が大きな位置を占めるという意味では共通する。台湾の日本人日本語教師、また天津における中国人日本語教師を対象に、初任期、中堅期、熟練期の教師の事例研究を行った。その結果、教育内容に主要な関心が行き、学習者や学習環境に目を配ることができない初任期の教師は、「二重の応答性」そのものがうまく機能しない、のに対し、授業スタイルが確立してくる中堅期においては、学習者の応答をモニタリングすること、すなわち「二重の応答性」がうまく機能するようになる。熟練期の教師にあっては、学習者の応答に対して、自らの応答を瞬時に、柔軟に変えていく力量を持つことが明らかになった。

その「二重の応答性」の発達には、教師の履歴において、ポジションの変化（例えば、全体のカリキュラムをつくる教務主任の経験）が大きくかかわることが明らかになった。その授業だけではなく、単元、あるいはカリキュラム全体で学習者をどのように育てるかという点が、「二重の応答性」の発達に大きく寄与することが明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　９　件）

① 森脇健夫、初任期教師の授業実践指導力の課題と課題克服のための支援ツール（ルーブリック）の開発、三重大学教育学部研究紀要　教育実践、査読無、第 69 巻、2018、531-539

② 森脇健夫、平成 29 年度「学力向上水神授業」の五十鈴中学校研究活動に関わって、伊勢市教育委員会　平成 29 年度事業報告書　学力向上推進事業、査読無、2018、116-117

③ 森脇健夫、平成 29 年度「学力向上水神授業」の五十鈴中学校研究活動に関わって、伊勢市教育委員会　平成 29 年度事業報告書　学力向上推進事業、査読無、

④ 康鳳麗、森脇健夫、坂本勝信、フレーズ習得を目指した「絵単語」による初級中国語学習の効果と課題、鈴鹿医療科学大学紀要、査読有、No.24、2017、75-85

⑤ 坂本勝信、谷誠司、コミュニケーション言語能力論における語用論的能力と社会言語能力、常葉大学外国語学部紀要、査読無、第 14 号、2017、61-76

⑥ 森脇健夫、康鳳麗、坂本勝信、教師の「熟練性」の研究―2 人の中堅中国人日本語教師の授 業の比較分析を通して―、三重大学教育学部研究紀要、査読無、第 68 巻、2017、355-367

⑦ 大西宏明、森脇健夫、「教えること」についての「観」の自覚と変容、三重大学高等教育研究、査読無、第 23 号、2017、15-24

⑧ 根津知佳子、山田康彦、森脇健夫(ほか 8 名)、教員養成型 PBL 教育における対話的事例シナリオ教育の評価方法の開発、三重大学高等教育研究、査読無、第 23 号、2017、69-80

⑨ 康鳳麗、森脇健夫、坂本勝信、日本語教師の「熟練性」の研究－熟練教師の目標概念の多層性、ネットワークと機能に注目して－、鈴鹿医療科学大学紀要、査読有、No.22、2015、31-44

〔学会発表〕（計　７　件）

① 康鳳麗、森脇健夫、坂本勝信、日本語教師の初任期から熟練期への「二重の応答性」の発達、第 66 回中部教育学会大会、2017

② 嶋田和子、坂本勝信、内山夕輝、白晧、「地域日本語教師」養成のためのプログラム開発と講座実施から見えてきたこと～「ともに社会をつくる仲間」という視

点から～、2017 年度日本語教育学会秋季大会、2017
③ 康鳳麗、森脇健夫、坂本勝信、「絵単語」を使った中国語初級指導、中国語教育学会、2016
④ 大西宏明、森脇健夫、「対話的事例シナリオ」による教員養成型 PBL 教育の評価と改善、日本教師教育学会第 26 回研究大会、2016
⑤ 山田雅敏、里大輔、坂本勝信（他 3 名）、身体知の言語化とその情報学的な段階モデル の応用 立位と歩行に注目して、日本認知科学会第 33 回大会、2016
⑥ 康鳳麗、森脇健夫、坂本勝信、ライフヒストリー的アプローチによる熟練日本語教師の「熟練性」の研究―「見えない目標」の形成と機 能に着目して―、日本語教育学会 2015 年度春季大会、2015
⑦ 森脇健夫、大日方真史、教員養成型 PBL 教育における対話型事例シナリオの到達点と課題、日本教師教育学会第 25 回研究大会、2015

〔図書〕（計　２　件）
① 坂本勝信（編者）、凡人社、日本語教育への道しるべ　第 2 巻　ことばのしくみを知る、2017、195

② 康鳳麗、坂本勝信、森脇健夫、三恵社、フレーズで学ぶ はじめての中国語、2015、102

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
康　鳳麗　　（KANG, Fengli）
鈴鹿医療科学大学・保健衛生学部・准教授
研究者番号：３０３９９０３４

(2)研究分担者
森脇　健夫　（MORIWAKI, Takeo）
三重大学・教育学部・教授
研究者番号：２１０７４４６９

(3)研究分担者
坂本　勝信　（SAKAMOTO, Masanobu）
常葉大学・ビジネスデザイン学部・准教授
研究者番号：４０３８７５０１

(4)研究協力者
（　　）